

スミス・ルネサンスの再解釈

三 好 宏 治

はじめに

経済学の父として名高いアダム・スミスであるが、常に高い評価を受けていたわけではない。特に、20世紀の前半は、ただちらりと見られるに過ぎない存在であった。それが、1970年代に一転し、経済学者スミスは高い評価を受けるようになり、スミス研究のブームともいってよい事態が到来する。このブームをスミス・ルネサンスと呼び、この時期に現在のスミス研究の基礎が出来上がったといっても過言ではない。

本論文の目的は、スミス・ルネサンスの再検討を通して、現代のスミス研究者が行うべき課題を探ることにある。スミス研究史のまとめかたに関する論文であり、サーヴェイ論文ではない。その点を最初に断わっておく。

本論文は、以下の構成で論述される。

第1節において、ケインズ主義の隆盛により自由放任主義のスミスが否定されたが、1970年代にケインズ主義が没落したからスミスが復活したという、スミス・ルネサンスの通説的解釈を確認する。そして、この解釈では、経済理論家スミスの再評価が説明できない点を指摘する。第2節では、スミス・ルネサンスの通説的解釈が1970年代のバイアスをそのまま受け入れている点を問題視し、その後の展開のために通説解釈に概念上の操作を加える。この作業を通して、1950年代と60年代のスミス評価が、通説的なスミス・ルネサンスの解説では無視されている点が明らかにされる。第3節において、通説では無視されて

スミス・ルネサンスの再解釈

いる1950年代のスミス評価を確認して、「見えざる手」＝完全競争というスミスのマイクロ評価こそがスミス・ルネサンス解明のカギを握っていることを明らかにする。第4節において、1970年代の「見えざる手」解釈の変遷を追い、均衡理論と競争理論の進化により、新たな解釈が提示された点を明らかにする。また、それらの新しい解釈では、「見えざる手」＝完全競争という考え方が否定された点も明らかにする。そして、最後に、スミス・ルネサンスの原因に関する筆者の解釈を提示したいと思う。

1. スミス・ルネサンス再訪

1976年は『国富論』出版200年の年であった。200周年を祝って世界各地でシンポジウムが開催され、また、多数の経済学者がスミスに関する論文を発表した。そのひとつが、レクテンヴァルドの「1976年からのアダム・スミフルネサンス？ 200年祭の産物。——彼の学問の再評価」(Recktenwald 1978)である。彼は、現在のスミス研究の盛況を過去の状況と比較して、「一種のスミス・ルネサンスが進行中であるように思われる」(Recktenwald 1978, 249)と述べている。

スミス・ルネサンスを整理した論文として、田中の「アダム・スミフルネサンス再訪」(田中 1997, 序章)がある。田中はスミスが20世紀の初頭まで軽視されたその理由を、次の2つにまとめている。

- (a) 「経済学のリカードゥ的純粹化の帰結として、スミスの歴史性や道徳哲学が軽視され、彼の著作のマルチ性が嫌われた」(田中 1997, 5) こと。
- (b) 「ケインズの『一般理論』(1936)の登場と「自由放任の終焉」宣言は、自由放任資本主義に対するマルクスの批判」(田中 1997, 5)とあわせて、「自由放任と市場の自動調節機構論の父」(田中 1997, 5)であるワルラスの先駆者としてのスミスをイデオロギー的にページしたこと。

そして、田中はスミス研究が復活した原因を2つあげている。これは、言い換えれば、主流派経済学者がスミス研究をおこなう動機といってもよい。⁽¹⁾

(a) 「19世紀的専門家視点や純粋科学的分析ではとらえきれない現代社会の多様な動向の中で、スミスの総体性、総合性が改めて注目・再評価されるようになった」（田中 1997, 7）こと。

(b) 「30年間にわたるイデオロギー的パージの執行人であったケインズ主義の行詰まりと社会主義」（田中 1997, 8）が破綻した⁽²⁾こと。

以上のまとめは、一見すると、スミス・ルネサンスの説明に何の問題もないように見える。そこで本節では、問題点を提示するために、スミス・ルネサンスの通説的解釈の根拠を再確認しよう。

I-i) 1876年から1950年ごろまで

さて、一般に、ルネサンスという言葉は、人文主義の復活、古典古代の教養の復活という意味である。そこから転じて、忘れ去られた思想家の研究が再び注目を浴びるとき、その思想家の名前をとって〇〇ルネサンスと名付けられたりする。つまり、スミスが一度は忘れ去られたという意味でもある。そして、実際、20世紀初頭には、スミスは忘れ去られた存在といっても過言ではなかった。

1876年の『国富論』出版100周年祭は、非常に活気あふれていた。1876年の経済学クラブにおける記念会合の司会はグラッドストーンであり、第2報告者がフランスの蔵相でしかもJ.B. セイの孫であった。⁽³⁾ また、古典派以後の方法論をめぐる限界主義者のジェヴォンズと歴史学派のレズリとの間で、はげしい⁽⁴⁾ 論争があった。ところが、『国富論』出版150周年祭にあたる1926年には、もはやスミスを通読する者がいなくなった。⁽⁵⁾ スミスは忘れ去られたのである。当然、そのような状況下では、スミス研究は盛り上がるはずはない。

スミスが忘れられるようになった原因は、マーシャルやワルラスにある。彼らによって作り出された新古典派経済学は、強固な支配的理論として同時代人

スミス・ルネサンスの再解釈

の精神を拘束していた。マーシャルによれば、スミスの最大の業績は「フランスおよびイギリスの同時代の人々や先行した時代の人々の価値に関する思索を結合し、発展させたこと」(Marshall 1920, 753/251)である。マーシャルはスミスの分析能力やオリジナリティを高く評価せず、総合能力を最も高く評価したのである。

スミスのオリジナリティの欠如は、当時のスミス研究者たちも同意した。スミス全集の編集者として名高いキャナンは、『国富論』出版150周年を記念して、「経済学者としてのアダム・スミス」(Cannan 1926)というタイトルの講演をLSEでおこなっている。その講演でキャナンは、『国富論』出版150年後の今、新しいことを発見するのは非常に困難であり、真実を述べるつもりではあるが、新しいものは何もないと断りを冒頭で入れている。そして、スミスの述べた理論のうち、今日まで真実とされているものは何もないと、暗に、スミスの分析能力を低く評価した。⁽⁶⁾

このキャナンの評価は低いと批判したのが、ホランダー (Hollander 1927)であった。彼は古典派の創始者としてのスミスを強調した。西洋史家がローマ以前にさかのぼらないのと同様に、経済学者もスミス以前にはさかのぼらない。我々は古典派の創始者としてのスミスに対して敬意を払うべきであり、キャナンの批判はミス・リードであるというのが彼の主張であった。

だが、いずれの場合も、その政策的影響や総合力についてはほめ称えるものの、オリジナリティや分析力の点ではそれほどスミスを評価していない。1926年、理論家としてのスミスは、全く評価されていない。⁽⁷⁾

スミスにはオリジナリティが欠如しているという評価は、第2次世界大戦後まで引き継がれる。シュムペーターは1939年から1948年までハーバード大学で経済思想史の講義を行う。そして、講義の傍ら精力を傾けて書いた大著『経済分析の歴史』(Schumpeter 1954)が遺稿をまとめ上げる形で1954年に出版される。この大著においてシュムペーターは、「『国富論』が、1776年において完全に斬新であったようなただ一顧の分析的な観念、原理もしくは方法をも含んで

いないことは事実である」(Schumpeter 1954, 184/382)と、やはり、スミスのオリジナリティを極めて低く評価する。

さらに加えて1926年以降、徐々に政策面における自由主義の権威が失墜してしまう。1926年は、ケインズが『自由放任の終焉』(Keynes 1926)を発表した年でもある。ケインズはヒュームとベンサムに始まる功利主義を批判し、いまや政府のなすべきこととなさざるべきことを再検討する時代であって、「干渉は、一般に不要で、かつ、一般に有害である想定は、これを捨てなければならない」(Keynes 1926, 289/151)と主張する。スミスは自由放任の思想史を解説する中で触れられた程度であり、直接的かつ主犯的な名指しではなかった。だが、スミスの理論家としての地位は失墜した。自由放任の後退と同時にスミスの政策的、思想的業績も低く評価されることとなった。

自由放任思想に疑念が投げかけられた1926年の3年後にニュー・ディール発の世界恐慌が起り、その処方箋としてケインズの『一般理論』(Keynes 1936)が公刊される。ケインズの『一般理論』の真意がなんであったかは今もって議論の分かれるところである。スミス解釈史として重要なことは、『一般理論』以降、市場が常に自動的に最適に至るとは考えられず、また、不況の際には政府は積極的に財政出動をするべきだという観念が広がっていったことである。

以上をまとめると、1926年の段階で、自由放任を唱えた古典派の設立者としてしかスミスは評価されていなかった。そして、よりどころであった自由放任の思想も、1930年代には否定されてしまうのである。かくして、「19世紀のそれと同様それほど活発ではあるといえないまま」(田中 1997, 5) 20世紀前半のスミス研究は低調なまま推移する。

I - ii) 1950年ごろから1976年まで

① ケインジアンとポスト・ケインジアン

戦後のアメリカ経済学の主導者サミュエルソンは、ケインズが否定した新古

典派の考えとケインズの考えを統合する。経済が失速し失業が存在している場合には、ケインズ的な財政政策が採用される。そして、いったん失業がなくなれば新古典派的な自由放任主義が復活する。マクロをケインズ、ミクロを新古典派というこのような折衷主義は、サミュエルソン自身により「新古典派総合」と名づけられた。⁽⁸⁾

新古典派総合という折衷案は「敵への降伏」(Samuelson 1997, 155)であり、ケインズ革命からの後退ととらえた集団がいた。ジョン・ロビンソンを中心とするケンブリッジ・ポスト・ケインジアン(以下、Cambridge Post-Keynsianの頭文字をとり、CPKと略す)である。CPKの考えでは、ケインズ革命の主要な成果は、①限界原理と均衡概念の否定、②貨幣ヴェール観の否定、の2点である。⁽⁹⁾ロビンソンによれば、「経済理論の教育面においても、経済政策の作成面においても、ケインズ革命はまだ推し進められなければならない」(Robinson 1974, 36/65)のである。

1954年にジョン・ロビンソンは、集計的生産関数における資本が何を意味しているかを問うことで論争が始まった。新古典派の資本を問う論争が、スラッファの多部門生産モデルや有効需要の原理に基づくマクロ的分配モデルを用いた批判者の側がイギリスのケンブリッジ大学に、新古典派生産関数や限界生産力に基づいた分配理論を用いた擁護者の側がアメリカのマサチューセッツ州ケンブリッジを本拠とするMITに集まっていた。このことから後年ケンブリッジ資本論争という名で知られることになる。

ケンブリッジ資本論争には、よくいわれるように、「経済成長の原因と帰結への関心が、過去四半世紀において、再びたかまってきたという事情」(Harcourt 1972, 1/1)が歴史的背景として存在する。この論争は、マクロ的な議論もさるものながら、双方の社会観や学問上の方法を争う論争でもあった。

CPKの考え方では、「議論が価値観から自由であるかのような装いをとらない」(ロビンソン, 1976, v)。つまり、価値の中立性の標榜が否定される。ロビンソンは、人間は「自然資源や他の投入物と同じようにたんなる「生産要素」

として取り扱うことはできない」（Robinson 1973, 61/84）とも主張する。そして、生産物の分配は技術によってのみ決定されるのではなく、「仕事がどのような社会制度の下でなされているかにも依存する」（Robinson 1973, 61/84）と述べ、主流派経済学が人間を見失っていることを攻撃した。そして、近年の経済成長が引き起こす環境破壊は、「最も自己満足的な自由放任の使徒ですら気づかざるをえないような深刻な段階になってきた」（Robinson 1973, 310/395）と警告した。

② ケインジアンとマネタリスト

さて、当時の主流派理論であった新古典派総合のマクロ政策論のカギは、フィリップス曲線である。これは失業率とインフレの負の関係を経験的に表したものであり、フィリップスによって発見された。インフレを名目的国民所得と実質国民所得に分割する理論を持たなかった新古典派総合は、フィリップス曲線によって欠けた方程式を補った。政府は景気が過熱しつつあるときにはインフレ抑え、景気が底冷えしたときには景気を刺激するためにインフレを許容する。この新古典派総合の理論体系に基づいた巧みな経済運営によって、戦後の持続的な好景気がおとずれた⁽¹⁰⁾。

ところが、1960年代末頃から高い失業率と高いインフレ率が生じフィリップス曲線では説明できない現象が発生する。1975年には9%の失業率と13%の高いインフレがアメリカをおそった⁽¹¹⁾。新古典派総合の学者は、うまくこれを説明できなかった。

ミルトン・フリードマンやロバート・ルーカスによって主導されたマネタリストが上記の事態をうまく説明する。フリードマンは人々の期待を組み込んだ垂直なフィリップス曲線を想定する。そして、インフレ率が上がった結果、失業率が減少するように見えるが、それは人々が誤った予測に基づいて行動した結果としての短期的現象である。合理的な人々はすぐに現実の結果と予測の過ちを修正して正しいインフレ率の元での経済的最適化を図り、それによって、

失業率は変化しないとフリードマンは主張する。さらに、それを側面援護するように、過去のデータに頼った推計値は政策が変更した場合には信頼できないという「ルーカス批判」が1976年に発表される。⁽¹²⁾

ルーカス批判が起こった同じ年に、スティグラーが『国富論出版』200周年祭で式辞を述べる。そこでスティグラーは「30年にわたる「イデオロギー的苦境」の後にシカゴ大学においてアダム・スミスは再び新古典派主義の固い要塞によって再び尊敬に値するものとしてみなされた」(Sobel 1987, 101)とシカゴ学派の勝利を高らかに宣言する。この発言は、しばしば勝利者の側のマネタリスト側のスミス評価としてしばしば引用されるものである。⁽¹³⁾

裁量的財政政策をすべきというケインジアンとルールに基づいた金融政策を主張するマネタリストの争いは、1970年前後から激しくなり、論争は徐々にマネタリスト側に有利に進んでいく。サミュエルソンは1970年前後を振り返り、ベトナム反戦運動の高まりの中で、自分は新左翼により「資本主義の悪しき走狗」(Samuelson 1997a, 159)と揶揄されており、また、当時のスタグフレーションの発生とマネタリズムの攻撃が、「ケインジアンとマクロエコノミストの自尊心さえ下げた」(Samuelson 1997a, 156)と述懐している。

③ 1976年：ケインジアンの没落とスミス・ルネサンス

以上の1970年代の新古典派総合の凋落と1870年代の古典派の凋落を重ね合わせて、なぜ、スミスが復活したのかを説明するのがT. W. ハチスンである。ハチスは、『国富論』出版200周年祭の盛況を、主流派理論の凋落の観点から明らかにする。

ハチスは1876年の特徴として「われわれはここに、確固たる正当説として長期にわたって厳然たる支配を続けていたところの、あるまさに中心的な理論的核心の、かなり突然の放棄という、経済思想史上、ほとんど他に比類するもののないひとつの事例を持っている」(Hutchison 1978, 75/83)と述べている。そして、『国富論』出版200周年祭の状況を「もちろん規模やその他多くの諸側

面が非常に異なってはいたけれども、100年前のイギリスにおける経済学の状態と、かすかにもせよ、ある一定の大まかな類似性を認めることができた」（Hutchison 1978, 1-2/4）のである。そして、両年とも、理論・政策・歴史の3つの領域で激しい論争を繰り広げられていた。

このハチスンの解釈を前提として、ブラックは、1976年にグラスゴウ大学で記念スピーチをおこなう。ブラックによれば、現代の経済学者がスミスに注目する理由は、「今日、多くの経済学者が経済成長の前途と結果について、魅力を感じなくなり、また多くの経済学者が同じように、実証的で価値から自由な科学としての経済学というながくほめそやかされてきた観念について、疑問を持つか、守勢に立つかしている」（Black 1976, 62/299）からである。さらに続けて、スミスの豊かな思想体系に触れた次の世代のスミス研究の特徴は、「経済学的諸問題をしっかりと倫理学と法学の文脈の中に置き、全体が正義の概念につらぬかれている」（Black 1976, 62/299）はずであると述べている。この言葉を裏付けるかのように、ホーコンセンの『立法者の科学』（Haakonssen 1981）、ウィンチの『アダム・スミスの政治学』（Winch 1978）、そしてホントとイグナチエフの編纂した『富と徳』（Hoht/Ignatief 1983）などと次々と新しいスミス研究が生み出され、スミス研究は新たな活況を迎えることになる。

スミスをイデオロギー的に否定したケインジアン凋落によってスミスは復活した。そして「経済学の危機＝新古典派的通説に対するダウトを契機に、新古典派的方法的個人主義とは異なる視覚から」（田中 1997, 8）スミスを総合的にとらえなおそうとしたためにスミスは復活した。以上が、通説的なスミス・ルネサンス解釈の背景である。

I-iii) 問題提起

本節において、我が国のみならず世界中のスミス研究者に長らく受け入れられてきたスミス・ルネサンスの通説的解釈を再構成した。そして、本節の締めくくりとして、通説的解釈では説明のつかない点があることを指摘したい。

スミス・ルネサンスの再解釈

スミス・ルネサンスという言葉をはやらせた原因でもあるレクテンヴァルドの展望論文によれば、スミス・ルネサンスの特徴のひとつは、「現代の洗練されたテクニクを使った幾人かの学者の肯定的な結果」(Recktenwald 1978, 255)にある。

伝統的に、リカードやミルといったいわゆる古典派の経済学者たちは、スミスを経済理論家として評価していなかった。価値論研究における低評価はリカードのころよりの伝統である。そして、I-iで確認したように、この否定的な態度は、労働価値論ではなく限界理論を用いた新古典派の経済学者たちにも引き継がれている。

ところが、現代の経済学者たちは、スミスに何か新しいものがあると信じて『国富論』を読む。スミスのオリジナリティを否定した消極的な態度は、もはや存在しないといってよいだろう。スミス・ルネサンス以降、主流派経済学者のスミス経済学に対する研究姿勢は、「スミスに敬礼せよ」(Samuelson 1977, 501)という積極的な賞賛へと変化している。そして、その態度は新古典派のみならず、価値論系の研究者にもある。これは、革命と呼んでも差し支えないほどの変化である。

なぜ、この変化が起きたのだろうか。倫理学と法学の文脈に置かれず、全体が正義の観念に貫かれていない価値自由な立場の者たちもが、経済学者スミスを理論的に再評価した原因はなんであろうか。通説的解釈は、この点に沈黙する。

II. スミス・ルネサンス解釈の問題点

前節で提示したように、一般的な解釈では、スミス・ルネサンスの原因は(a)-(a)'の(b)-(b)'の2つの説明にまとめ上げられている。だが、同じく前節でみたように、この2つではスミスの理論評価が覆った理由の説明となるには説得力が不足している。

そこで、本節では、前節で再確認した2つの論拠に批判的な再検討をくわえ

る。主流派経済学者たちがスミス研究に興味を持った歴史事実の解説において、どこに問題があるのかを確認してみたい。

① 「自信喪失説」

さて、前節で確認した通説においては、1970年代の主流派経済学は左右両方からの攻撃の中で自尊心を失っていたとされる。まず、(a)-(a)'のスミス・ルネサンスの発生原因とスミス研究の動機づけの解釈が、主流派経済学者の説明としてどれほど適切であるかを検討しよう。

1970年代、自尊心を失っていた主流派経済学の内部から、スミスを積極的に読むべきだと主張した論文の1つに、ボールドィングの「サミュエルソンの後に誰がアダム・スミスを必要とするのか？」(Boulding 1971)がある。

ボールドィングは、経済学の進化の促進と経済学者の退化を食い止めるための手段として、古典（スミス）を読むべきと主張している。ボールドィングはマネタリストが主張する合理的期待形成の流行の結果、データを採集し、そこからなんらかの関数を導き出そうとする若手の経済学者たちは関数が現実とどのような関係を持っているかを考慮しないようになっていた。そのような「全く血と汗と涙の感覚を持っていない」(Boulding 1971, 252) 経済学者たちの現状にたいしてボールドィングは危機感を抱いていた。古典を読むことで得られる現在の経済学から排除された領域との遭遇は、若手の経済学徒に新鮮な驚きを与えるだろう。ボールドィングは一種の解毒剤としてのスミス、あるいは古典の効用を主張したのである。

水田はこの論文の存在を知ること、自らの解釈に自信を強め、「これはほんもののスミス・リヴァイヴァルである」(水田 1972, 34) と断言した。⁽¹⁴⁾ 水田はこの論文を、「アメリカ経済学の反歴史的思考の危機を反映」(水田 1972, 42) しているととらえたがゆえに、スミス・リヴァイヴァルの存在証明であると受け取ったのである。1973年にホランダーが大著、『アダム・スミスの経済学』(Hollander 1973) の刊行する。水田は、やはり、この著を主流派経済学の

危機意識としてとらえていた。なぜならば、主流派経済学は「先端だけで勝負すべきもの」だからだ。それがその方法論を捨て、歴史に応援を求めて理論の意味を再検討するのは、「危機感=自信喪失がよほど深い」（水田 1972, 37）のである。

以上により、(a)-(a)'の流れでは、主流派の経済学者たちは方法論的合理主義という自らのあり方に疑問を投げかけ、人間を描いたスミスに魅力を覚えて経済学の方法論を見直すためにスミスを読んだのだと言うことができる。(a)-(a)'を、水田の言葉をとって、「自信喪失説」とよぼう。

しかし、「自信喪失説」の証言は、1970年代のものであることを忘れてはいけない。新古典派はポスト・ケインジアンとマルクス派に道を譲るべきという当時の（あるいは現在においても）批判者の間に蔓延している知的風潮の影響を受けている。⁽¹⁵⁾「自信喪失説」は、新古典派総合とマネタリストとでおこなわれた主流派経済学内部での抗争とケンブリッジ資本論争という異端派からの攻撃を区別していない。「自信喪失説」では、それらは区別せずに主流派経済学の危機意識とひとまとめにされている。

サミュエルソンは、1976年の『経済学』の10版でも、「社会科学の女王」（Samuelson 1976, 6/6）として経済学を賞賛することをやめていない。そして、ボールディングの主張は、「サミュエルソンとスミスのどちらも必要」（Boulding 1971, 251）なのである。ボールディングは、けっして、サミュエルソンを捨てろとは主張していない。そもそも、スミス・ルネサンス期の主流派経済学者たちが、本当にそこまでの自信喪失状態にあったのだろうか。主流派の内部にあっても、攻撃者の側のマネタリストは自信に満ち溢れていたと考える方が自然ではないだろうか。

また、防衛側のシンボルとして使われたサミュエルソンは、1970年の第8版において、変更をくわえなかった章がないほどの大改訂を加えている。この大改訂は、講義に使用する際に不満を感じたからという理由もある。だが、それだけではなく、「マッカーシー時代に特徴的であった教師を露骨に金権政治の

力で脅迫する」(Samuelson 1970, vi) という方法ではなく、根拠となる基礎資料を展開し、論理的な推理を駆使してくる批判者たちに真摯に応えるために大改訂をおこなったのである。自らの経済学の正しさに自信を持っていると解する方が自然であろう。

宇沢が「歴史の捻転」(宇沢 1994, 170) と表現したその後の合理的期待革命の成功とその展開を考えた時、「自信喪失説」の過失がより鮮明になる。スミスの豊かな人間観に触れた主流派経済学者たちは、結局のところ、自らの経済学のあり方を悔い改めていない。我々は、ケインジアン対マネタリストの争いが、20世紀の終わりには、ニュー・ケインジアンと新しい古典派の争いへと進化したことを知っている。現在、合理的期待革命を経て、ミクロの基礎に基づいたマクロ経済学という共通の知的基盤で論争が継続している。その後の歴史の流れと照らし合わせても、「自信喪失説」はスミス研究を行った動機とするには問題点が多すぎる。

初期の CPK は皆、「その思想の理論上および政策上の内容は、ケインズよりはむしろマルクス」(Harcourt 1972, 18/24) に従っていたのである。マルクスの価値判断にたった CPK の攻撃が「自信喪失説」の主張そのものだということを考えたとき、「自信喪失説」は、主流派経済学の外部からの攻撃を、主流派経済学内部の自己反省と誤認してしまったと解釈する方が的を射ているだろう。

② 「他殺説」の問題点.

さて、次に(b)-(b)'について考えてみたい。

(b)から(b)'の流れは、①で述べたケインジアンの凋落を指している。この凋落について、田中は別の論説において、「20世紀の中葉までマルクスとケインズの狭み撃ちにあって、スミスは死んだ」(田中 2000, 165) と表現している。文章の主体と客体を入れ替えれば、マルクスとケインズによってスミスは殺されたと読み替えることができる。そこで、ケインズとマルクスがスミス研究を

スミス・ルネサンスの再解釈

つぶしたとする(b)-(b)'の考え方を「他殺説」⁽¹⁶⁾とよぼう。

「他殺説」の解釈では、無視できない歴史的イベントがある。前述したサミュエルソンの『経済学』第8版の序章で触れられていた、1950年代のアメリカを襲ったレッド・パージである。レッド・パージとは、アメリカで1948年頃から1950年代前半に掛けて行われた共産主義者に対する弾圧活動である。当時のアメリカでは、「政府、大学などにいる共産主義者を排除すると称する活動」(宇沢 1994, 134) が精力的に展開されていた。そして、その先鋒となった非米活動委員会がまず攻撃対象とした経済学者は、「マルクス経済学を専門とする人々」(宇沢 1994, 135) であった。その結果は、もちろん、アメリカにおけるマルクス経済学に破滅的な影響をもたらした。たとえば、アメリカのマルクス経済学を主導していたハーバード大学のポール・スウィージーは、大学から追放されたのである。

レッド・パージ自体は1954年にマッカーシーが自殺した後、急速に、下火になった。だが、その後もマルクス経済学の衰退は続く。マルクス経済学者たちは戦後の持続的な好景気の予測と説明に失敗し、西欧諸国の戦後の植民地解放は旧来的な帝国主義論とは相いれないものであった。レッドパージの残り火も手伝い、イデオロギー的のみならず理論的にも怪しいものとして映っていた。そして、新古典派のテキストであるサミュエルソンの『経済学』は、「版を重ねるごとにマルクス主義に対する攻撃は拡張された」(Skousen 1997, 147) のであり、「マルクス経済学は1957年には非常に衰退し、だれひとり、サミュエルソンの酷評に反対してマルクスの弁護に立ち上がる者はいなかった」(Howard/King 1998, 245/367) のである。

スミスを殺した容疑者であるマルクスは、1950年代に殺された。では、スミスを殺したのはケインズの単独犯かということとそれも間違っている。なぜなら、レッド・パージはもう一人の容疑者でもあるケインズをも殺したからだ。「非米活動委員会の中傷、攻撃は、マルクス経済学者からさらに、その範囲を広げ、いわゆる進歩的な思想の持ち主、あるいはケインズ経済学者にまで及ぶように

なっていた」（宇沢 1994, 137）のである。

サミュエルソンは自らのテキストが世界的なベストセラーとなった陰には、他のケインズ主義者を襲った不幸が存在したと過去を振り返っている。サミュエルソンの『経済学』は最初のケインズ経済学の本ではなく、それ以前に、ターシスの優れたテキストが存在したのである。だが、ターシスは「ケインジアン-マルキスト」と誹謗中傷を受け、そのテキストが市場から撤去された。ケインズ主義はその介入主義的性格からマルクス主義の親戚とみなされた。ニュー・ディールに関わったというだけで職を追われる時代である。ケインズ経済学も、レッド・パージの影響を受け、勢力を失っていたといえよう。⁽¹⁷⁾

1950年代には、「他殺的」の犯人とされてきたマルクス派もケインズ派も、いずれもレッド・パージにより社会的に抹殺されていた。これは、1950年代にスミスがイデオロギー的に復活している可能性を示唆する。通説的なスミス・ルネサンスは70年代に注目するあまりに、50年代への注目が無いがしろになっている。筆者はここに謎を解くカギが隠されていると考える。

III. 1950年代のアダム・スミス評価

スミス・ルネサンスの伝統的な解釈は、「自信喪失説」、「他殺説」とともに誤解を含んでおり、再検討を要することが前節において明らかにされた。本節では、通説的解釈での空白期間である1950年代に主流派経済学がスミスをどう解釈していたかを再検討する。また、その検討を通して「他殺説」の過ちも指摘したい。

① 新古典派総合のスミス解釈

さて、上述したように1950年代のレッド・パージによりケインジアンは勢力を失っていた。だが、新たな疑問が生じてくる。ケインジアンがレッド・パージにあったにもかかわらず、なぜ、マクロにおいてケインズを使用していた新古典派総合が主流派としての地位を得られたのかという問題である。この問い

スミス・ルネサンスの再解釈

に対する答えは、ある意味ですでに述べている。ケインズ革命は結局失敗して、新古典派の体系に吸収されたからである。

サミュエルソンの第4版の『経済学』から、第4版から経済学の系統図が載るようになった。この系統図では新古典派に連なるもの以外はすべて無視されているにもかかわらず、そこでスミスは捨てられていない。スミスは「新古典派統合の先祖」(Skousen 1997, 146)とされている。そして、サミュエルソンは、スミスの「見えざる手」は完全競争の結果到達するパレート最適の概念であるという我々にとっておなじみの解釈をする。⁽¹⁸⁾これは、サミュエルソンの『経済学』のみではなく、アローとハーンの『一般均衡分析』(Arrow/Hahn 1971)でも採用されている。たしかに、スミスは一般均衡論を厳密に論証はしていない。だが、それでも力学の均衡の概念を用いて、競争により資源の効率的配分を認めたのであるから、スミスは「一般均衡理論の創始者」と述べる⁽¹⁹⁾ことができるのである。

スミスは、新古典派総合にとっては1950年代から一貫して賞賛され続けている。新古典派総合はシンボルとしてのスミスを前面に押し出し、称賛することによって、レッド・パーズを乗り切ることができたともいえる。⁽²⁰⁾つまり、1950年代のスミスは、けっして、イデオロギー的に抹殺されてはいないのである。

概して、新古典派総合の経済学者たちは「長期においてスミスとマーシャルの古典的理論は正しい」(Mankiw 2006, 35)と信じていた。⁽²¹⁾「他殺説」は、これを誤認している。1970年代以降の主役であるマネタリストたちは、短期においても市場の調整機構を信じていた。その結論を支えた理論が、合理的期待形成である。短期においても市場は最適なパフォーマンスを達成することを証明する合理的期待形成論は、マネタリストのミクロ的基礎付け部分である。そして、合理的期待形成論は、「まさしく伝統的な一般均衡分析と完全に整合的」(Dow 1985, 153/187)である。つまり、ミクロ経済学の分野では政権交代は発生していない。「他殺説」は、この点においても誤解している。

新古典派総合と原理的に同じ「見えざる手」=完全競争というスミス観を持

つまネタリストの勃興は、それだけでは、主流派経済学者をスミス研究へと向かわせる動機としては説明不十分である。

② ハーバード学派

さて、マイクロ経済学のテキストでは、完全競争を前提として議論が進められており、スミスの「見えざる手」は完全競争市場で到達する最適な資源配分を意味しているのであった。だが、現実には完全競争などは存在しない。そこで、完全競争ではない現実の市場分析のツールが求められる。その学問が産業組織論である。

産業組織論とは、スティグラーの言葉を借りれば、それは「価格理論または資源配分の理論、つまり、あまり適切ではないが、今日、マイクロ経済学とよばれているもの」(Stigler 1968, 1/1)である。だが、産業組織論はマイクロ経済学と同じ理論を用いるが、マイクロ経済学それ自身ではない別の学科である。なぜならば、経済理論は形式的であるため、その分析用具を用いたのでは費用曲線や集中度などの経験的測定についての詳しい研究ができないからである。そこで、限界原理や均衡理論のようなマイクロ経済学の技法は取り入れながらも、完全競争という仮定を外して、現実の産業組織や独占禁止法や公的規制を分析する産業組織論という学科が必要となるのである。

1950年代のアメリカの産業政策をリードしてきたのは、「産業組織論のハーバード学派」である。彼らの基礎的理論は、S-C-Pパラダイムに基づいて思考される。S-C-Pとは、構造(Structure)、行為(Conduct)、成果(Performance)の略である。その意味合いは、ある産業に存在する企業の数は、その産業に存在する企業の行動(生産量)を決定する。そして、各企業の行動によって、その産業の利潤率は決定されるという考え方である。

S-C-Pパラダイムに基づく「産業組織論のハーバード学派」は、大企業が獲得する高利潤は、企業が少数であることから生じると考える。少数の大企業は、独占力を行使して、市場における経済厚生を悪化させる。それだけではな

スミス・ルネサンスの再解釈

く、彼らの考え方では、X非効率の発生により本来よりも高い費用水準で企業は操業している。そのために、寡占市場はパレート最適に到達してないので是正されなければならない。ハーバード学派の考え方では、「企業数が増え完全競争に近づくにつれて資源配分上の効率性が達成」(井手 1994, 18)される。そこで、ハーバード学派は、企業の集中度が高い時には政府が積極的に介入すべきだと考える。

この産業組織論的解釈は、もちろんスミス解釈にも影響を与えている。不完全競争下では、スミスの「見えざる手」は働かないのである。したがって、不完全競争市場では、経済は自然なままに任せておいても最適にならず、独占力を保持している大企業を破壊し、完全競争の状態に近づけなければならない。そして、完全競争の状態を回復すれば、再び「見えざる手」に任せればいいのである。⁽²²⁾

③ アダム・スミスの定理

さて、独占力を保持する大企業は解体しなければならないものである。だが、多数の子会社を使って産業を支配している企業の集合体を大企業と呼んでいいのだろうか。これは、当時の産業組織論に携わる者にとって重大な問いであった。⁽²³⁾ この問いの中で、スミス研究に多大な影響を与えるスティグラーの「分業は市場の広さによって制限されること」(Stigler 1951) という『国富論』、第1編第3章のタイトルを使用した論文が発表される。

スティグラーは、このスミスの章タイトルを「アダム・スミスの定理」とよび、そして、この定理は完全競争と表面的にはジレンマを引き起こすのだと考えた。周知の通り、完全競争を前提とした場合、各個別企業は価格支配力を持たないと仮定され、各個別企業が直面する需要曲線は水平となる。だが、スティグラーは、「アダム・スミスの定理」から推論すると、スミスの論理には個別企業が直面する需要曲線は右下がりであり、収穫は逡増するという仮定も含まれていると考えた。スミスの分業論は、分業の規模が進むほど限界生産力が逡

増する。もし、分業を大規模にすすめることにより、より小規模な生産者よりも低い費用で商品を生産できるようになるならば、効率性の優れた大規模生産者は他の生産者を淘汰することができるだろう。もしも「アダム・スミスの定理」が正しいならば、「諸産業は独占の特徴を示すことになるし、あるいは、諸産業が競争の重要な特徴を示しているのであれば、この定理が誤りであるか、さもなければ重要性の乏しいもの」（Stigler 1951, 185/164）になってしまう。

はたして、「アダム・スミスの定理」は正しいのであろうか、それとも、重要性の乏しいものなのだろうか。スティグラーは、産業の垂直的分業の規模を規定するものとして考えるならば、「アダム・スミスの定理」は正しいうえに重要であると評価する。さらに、それだけではなく、「この定理は経済の構造と働きについて、いくつかの側面に光を投げかけている」（Stigler 1951, 138/176）とスティグラーは述べ、そこには既存の産業間の分業理論を超越した何かを保有していると考え。

後述する1970年代と違って、1950年代のスティグラーは完全競争の信奉者であった。そこで、「アダム・スミスの定理」を最適企業規模の問題と結びつけることによってなんとか新古典派的枠組みにおさえようとした。分業が市場の規模によって決定されるとは、単に、使用できる技術が市場規模によって決定されるという問題と解釈したのである。

IV. スミス・ルネサンスの再解釈

前節において、1950年代の主流派経済学内部のスミス解釈を見た。そこでは、「見えざる手」が完全競争や一般均衡を表すという解釈は新古典派総合もマネタリストも同じである点が確認された。また、1950年代は、マクロだけではなくミクロにおいても介入主義的政策がとられており、不完全競争では「見えざる手」は働かないという解釈が出されていた。これらのミクロ経済学におけるスミスの取り扱われ方は、通説的、スミス・ルネサンス解釈では全く触れられていなかった。

主流派経済学にとってのスミス・ルネサンスとは何であったかを再検討するためには、1970年代の注目すべき問題はマクロ経済学ではなく、ミクロ経済学の問題であると考えを改めなければならない。そこで、本節では、1970年代に一般均衡理論、および、完全競争がどのように解釈されていたかを検討する。この作業をとおして、なぜ、現代の経済学者たちがスミスを肯定的に解釈するようになったかを明らかにしたい。

IV-i) 一般均衡論の進化と「見えざる手」

さて、「自信喪失説」において触れられたケンブリッジ資本論争は、「資本論争」と名付けられたため、集計的生産関数や成長理論に関する争いなど、主にマクロ的テーマで争われたイメージが強い。だが、ケンブリッジ資本論争を概括したハーコートが述べるように、「価値と分配の限界理論は正しい理論であるか、また妥当な理論であるかを巡って、異なる立場の間の衝突がある。上述の2つの集団の間には、埋めることのできない溝」(Harcourt 1972, 1/1-2)が存在する。つまり、ケンブリッジ資本論争には、そもそも限界理論は正しいのかという、ミクロ的な立場の違いも存在する。

マーシャルのジレンマとして知られている問題がある。仮に、規模の経済性が存在するならば限界費用曲線は右下がりとなる。もし、プライステーカーとして行動する企業に与えられる価格が限界費用よりも上方に存在するならば、企業はいくらでも生産を増やしていく。だが、これは現実的ではない。現実の世界には完全競争は存在しない。そこにあるのは企業が価格支配力を持つ寡占市場である。教科書的なU字型の曲線を用い、価格を所与として生産量を決定する新古典派経済学の生産理論は、現実の企業行動を全く説明できてない。⁽²⁴⁾

CPKは、右上がりの限界費用曲線を元に限界原理による価格決定理論で完全競争を前提に市場を分析しようとするのは、誤っていると考える。彼らは巨大企業によって支配される寡占市場こそが現代経済学の分析対象であると考えていた。彼らの理解によれば、巨大企業の意味決定理論は価格と生産量の関係

だけではなく「投資や金融を通して経済全体に影響を及ぼす，すなわち，マクロ理論のミクロの基礎」（奥山，2006，192）を提供するのである。

このような問題意識で作られた CPK の価格理論は，一般均衡理論とは全く異なる。現在でも，彼らは統一した価格理論を持っているとは言い難い。だが，少なくとも，「すべてのポスト・ケインズ派モデルはコストプラス・プライシング〔単位費用に利益を加える価格設定方式〕」（ラヴォア 2008，61）を採用しているという共通点がある。

では，異なるミクロ的基礎に基づいた CPK のスミス観は，限界原理に基づいた新古典派やマネタリストのスミス観と，どう異なるのだろうか。CPK は，理論的枠組みが一般均衡論の枠組みと異なることを主張するために，学説史的な整理をおこなう癖がある。「ポスト・ケインズ派理論と正統的な新・新古典派理論【引用者注：ニュー・ケインジアンのこと】との根本的な違いのいくつかは，価値論の発展を考察することによって見いだすことができる」（Kregel 1975，19/44）からだ。そのため，ロビンソンの学生向けに書かれた教科書も，第1部が経済学説の整理に当てられている。

そして，主流派経済学と対照的にマルクスの影響の強かった CPK 第1世代ではスミスは一般的に低く扱われている。なぜならば，重農主義が理解していた社会的階級の再生産を把握する壮大な循環を取り扱っていないからである。また，価値理論においてもリカードほど整理されていない。限界原理を信奉する主流派経済学の立場から見ると，CPK のスミス像は，『国富論』出版150年祭のスミス像よりもさらに古い。ただし，限界理論と一般均衡論を否定することによって，主流派に一般理論の防御帯の構築を敷きなおさせた点で，間接的にスミス研究を促進させた。

さて，1870年代にワルラスによって展開された一般均衡の数学的表現は，方程式の未知数と解の数が一致すれば均衡が存在するという非常に原始的なものであった。一般均衡理論は1930～40年代にヒックスやサミュエルソンによって微積分を用いた形に進化する。そして，1950年代には凸性集合と位相幾何学を

スミス・ルネサンスの再解釈

用いて一般均衡の存在条件を研究するようになる。

ホランダーの『アダム・スミスの経済学』の序章を、この観点から読み返してみよう。ホランダーは一般均衡の枠組みを用いてスミスを読むことを正当化している。その序章の前半部分は、1970年代当時の主流派経済学の理論的發展にさかれている。またホランダーは、「われわれは今や一般均衡の必要・十分条件について、従来到達したことのない程度にまで認識を深めており、その意味で価格機構の働きについてのわれわれの評価が進歩をとげてきた」(Hollander 1973, 11-12/10)と解説している。つまり、ホランダーは、分析で用いる均衡理論が20世紀の前半に用いられた一般均衡理論とは異なる水準に達していることを前提に研究をおこなうと述べている。

ホランダーは、スミスが資源配分において価格メカニズムの作用を認識していたと主張する。だが、ホランダーが結論として導き出したのは、スミスが価格メカニズムで取り扱おうとしていたのは、時間の経過とともに変化する相対価格を考慮に入れた諸産業への動学的な資源配分理論を問題にしたことである。スミスの感嘆に値する業績は競争的価格メカニズムの原理を「時間の経過を入れて投資順位の問題に適用したこと」(Hollander 1973, 308/449)なのである。

1950年代のスミスの「見えざる手」の評価は、一般均衡理論の先祖であるという、ただ単に系譜上の先祖として認識されていたにすぎない。もう一方の1970年代の「見えざる手」の評価はそうではない。スミスが「見えざる手」として考えていたのは一般均衡理論の応用問題と解釈されたのである。ある意味で、スミスは現代の経済学者の一步先を行っていたのである。だから、スミスは肯定的に評価されたのである。このようなスミス評価の傾向は、一般均衡の進化がない限り、生まれてこなかっただろう。

IV-ii) 新シカゴ学派とスミス・ルネサンス

さて、1970年代の経済学における事件として、スタグフレーションの発生とマネタリズムというマクロ経済学的な出来事ばかりがクローズアップされる。

だが、「ミクロのレベルでも類似の状況が、程度の差こそあれ進行していた。それは市場と政府の役割分担をどのように考えるべきかという問題であり、「市場の失敗」と並んで「政府の失敗」ならびに「規制の失敗」が新たな問題として提起されてきた」（野方 2003, 132）のである。

そして、その結果、産業組織論において主流となる考え方が変化する。

ハーバード学派にとってかわったのが、転向したスティグラーを中心とした、「産業組織論のシカゴ学派」である。「産業組織論のシカゴ学派」では、S-C-P パラダイムの因果関係を逆にとらえる。ある企業が高利潤をあげているのはその企業が効率的な操業をおこなっているからである。そして、効率的な企業との競争に負けていく結果、その産業には少数の企業しか存在しなくなる。つまり、「産業組織論のシカゴ学派」の考え方では、寡占市場の企業が高利潤を獲得しているのは効率的に行動した結果であり、政府はそれに対して介入すべきではないという「産業組織論のハーバード学派」と正反対の結論が出てくる。マクロ経済学だけでなく、ミクロ経済学でも市場と国家の考え方が変化したのである。

1980年代のレーガン政権の反トラスト政策は、完全競争、すなわち無数の企業による理想像を前提にしていたのではない。少数の企業でも有効な競争が行われているという、「産業組織論のシカゴ学派」を理論的基礎に置いていた。1981年にレーガン政権が誕生して以降独占禁止政策でも、緩和政策においても政治的な有利さを得て、台頭した。こうして「産業組織論と反トラスト政策において、ハーバード学派は排除され、その闘いの軍配はシカゴ学派にあがった」（三宅 2009, 180）のである。

ここで、第1節で引用した200周年祭でのスティグラーの式辞の内容を産業組織論の政権交代と結びつけると「他殺説」のもうひとつの間違いが理解できる。スティグラーがシカゴ学派について述べる時、それは「マネタリストのシカゴ学派」ではない。自らが中心である「産業組織論のシカゴ学派」なのだ。そして、スティグラーは自由な市場が達成する効率性というスミス以来の思想

スミス・ルネサンスの再解釈

をハーバード学派がイデオロギー的に抹殺していると考えた。

スティグラの式辞は「産業組織論のハーバード学派」がスミスを殺し、それを、「産業組織論のシカゴ学派」が救い出したのだと解釈したほうが通りがよい。「他殺説」は、目撃者の証言を誤っている。すくなくとも、スミスを殺した容疑者として、「産業組織論のハーバード学派」を付け加えるべきである。

無論、ハーバード学派はシカゴ学派にあっさりと道を譲ったわけではなく、1960年代後半から激しい論争を繰り広げてきた。はたして、大企業は独占力を行使しているから利潤を獲得しているのであろうか。それとも、高効率であるから大企業になったのであろうか。そして、いったん大企業になり独占力を獲得した後でも、その企業は効率的な操業をおこない有効な競争が行われているのであろうか。

産業組織論の論争に注目すると、グラスゴウでの報告論集が『市場と国家』(Skinner/Wilson 1976)というタイトルでまとめられたことは意味深長である。当時のスミス研究は、マクロ的な自由放任論だけではなく、ミクロ的な産業政策における自由放任論の是非を問うという、きわめて政策的な論争の渦中で読まれたことが理解できるからだ。

そして、この論争の中で「アダム・スミスの定理」に再び注目が向けられた。「アダム・スミスの定理」を考えるならば、収穫逓増と完全競争が矛盾しないということが理論的に証明されない限り、「見えざる手」=完全競争と述べることは難しい。したがって、スティグラの1951年論文をうけとめ、あるいは、不完全競争に注目することで、「アダム・スミスの定理」を独自に問題視したスミス研究では、「見えざる手」=完全競争という新古典派のスミス解釈に否定的な取り扱いがされる。

「見えざる手」は完全競争を意味しないということを、もっとも鮮やかに論証したのがコンティスタビリティ市場の確立にも一役買った、シロス・ラビーニ (Sylos-Labini 1976) である。スミスにとって競争を阻害する要因は政府の規制によって生じる参入の阻止である。また、独占ではなく、親方たちの協力

が高価格の原因である。スミスにとっての競争とは「自由な参入によって特徴づけられる」ものである。

分業の働きを収穫逓増とする限り「アダム・スミスの定理」から逃れられない。そして、この考えが新古典派の一般均衡論批判と結びついたとき、そもそもスミスはワルラスの理論的な先祖とみなしてよいのかという考えに行きつく。『アダム・スミス論集』（Skinner/Wilson 1975）に収録されたリチャードソンの「競争と収穫逓増に関するアダム・スミス」（Richardson 1975）は、そのような議論の典型と言える。「現代の均衡分析によって使用された数学的モデルの示唆とは非常に異なる働きをする経済システムの概念をスミスが持っていたことは非常に明白」（Richardson 1975, 354）なのである。

スミス・ルネサンス期におけるもうひとつの「見えざる手」の解釈の特徴は、スミスの「見えざる手」が完全競争や静学的な一般均衡を意味しないということが証明された点である。スミスの「見えざる手」は寡占市場においても作用する。新古典派が誤って解釈していた競争の正しい観念を理解していたから、スミスは偉大な経済学者といえるのである。

むすびにかえて

以上、本論文において、スミス・ルネサンスを再検討してきた。その結果、2つの点が明らかになった。

まず第1に、スミス・ルネサンスの解釈についてである。

スミス・ルネサンス期の主流派経済学者たちに、新古典派的均衡論の先祖としてのスミスを確認するという後ろ向きな理由でスミスを読んだ形跡はほとんど確認できない。また、彼らの研究態度に経済学を捨てようとする意識は見いだせない。彼らは『国富論』を読みながらも主流派経済学を捨てていない。そして、マルクス主義とケインズ主義によってスミス研究が凋落したという解釈も誤りであった。ニュー・ケインジアン第1世代である新古典派総合は、スミスを称賛し続けていたのである。

スミス・ルネサンスの再解釈

スミス・ルネサンスに対する通説的解釈はその原因の解釈において誤っており、原因が誤っていたからこそ動機づけの解釈も誤っていたのである。より根本的なイデオロギー的くびきはケインズとマルクスではなく、ワルラスとマーシャルであったのだ。均衡理論と競争理論の主流派内部の進歩によって、古いマーシャルやワルラスの解釈からスミスが解放された結果、スミス・ルネサンスが生じたとするほうが自然な解釈なのである。

第2に、「見えざる手」の解釈の変化が発見された。

スミス・ルネサンスによって、少なくとも、単純な静学均衡としての一般均衡論とスミスの「見えざる手」を結びつける解釈は、いずれの方向性からも否定された。そして、スミスにとっての競争の有効性は、無数の競争者によって担保されるものではなく、市場への自由な参加者によって獲得できるものであった。「見えざる手」を完全競争と結びつける解釈は、誤っていると確認されたのである。新古典派ミクロの教科書的解釈は、「歴史的なひどいこじつけ」(Blaug, 2000, 153)に過ぎないのである。

ここで、新しい疑問が発生する。それは、「ひどいこじつけ」に過ぎなかったはずの「見えざる手」=完全競争という解釈がスミス・ルネサンス以降もずっと生き残り続けていることだ。「見えざる手」は新古典派の競争観と市場観の枠内に取り込まれ、「新古典派経済学、より一般的にはミクロ経済学では、アダム・スミスの経済学を自由放任主義と整合的な完全競争と厚生経済学の定理として位置づけ」(奥山, 2006b, 143)ている。これは、学部生向けだけではなく、大学院向けの標準的テキストとして名高いMWGにおいても「厚生経済学の第1定理はアダム・スミスの見えざる手に正式な表現を与える」(Mas-Collel/Whinston/Green 1995, 524)と解説されている。

また、田中は1989年以降のスミス研究の特徴として、「『国富論』の倫理学偏向的解釈と政治学的・国家論中心的解釈に対する全面批判と、それに伴うより自由主義的・経済学的スミス像の復活」(田中 1997, 13)をあげている。そして、それらの経済学的なスミス解釈の共通の問題点として、「完全競争モデル

を前提にした議論」（田中 1997, 21）があると述べている。スミス研究の側にも、「見えざる手」＝完全競争という解釈が残ってしまっている。

誤った、あるいは、否定されたはずの解釈が生き残ってしまったことは、科学史としての経済思想史において興味ある問題であろう。また、一人のスミス研究者として、誤った観念が放置され続けるどころかますます流布されつつあるのを問題に思う。なぜ、「見えざる手」＝完全競争という考えが生き残ってしまったかを解明する作業が、別途、必要であろう。

これは、スミス研究者が行うべき仕事である。

注

- (1) 本論文での主流派経済学、異端派経済学の区別はラヴォア（2008）に従っている。
- (2) (a)や(a)'等の記号は、報告者が整理の都合上、付け加えたものである。
- (3) 藤塚（1973）、58-59ページ、参照。
- (4) cf. Hutchison（1978）、Chap. 4.
- (5) cf. Blaug（1978）、p. 36/59-60 ページ。
- (6) ただし、キャンンは①重商主義的な富の概念の放棄、②一国全体ではなく一人あたりの富を問題としたこと、③利己心の追及が称賛されるべき行為であることの3点は評価されるべきとしている。
- (7) 「1926年の経済学者たちが、スミスの理論的な業績にたいして、低い評価を与えたことを、解明する手がかりである。＜中略＞この展望においては、市場経済の分析に対するスミスの功績が、「たいしたものではない」と片付けられうるということは、全く自然なのである。」（Black, 1976, 58/293）
- (8) 根井（1992）、61-64ページ、参照。
- (9) cf. Robinson（1973）、pp. 46-51/64-71 ページ、参照。
- (10) 廣瀬（2011）、44ページ、参照。
- (11) cf. Farmer（2010）、p. 60.
- (12) 横田（2011）、参照。
- (13) この発言の真意を制度学派の立場から見たソーベルは、スミスの『国富論』は「シカゴ学派」の方法と同じであり、その信念も一致する」（Sobel 1987, 101）と解釈する。
- (14) 水田のボールディングの論文に対する学術的評価そのものは低い。なぜならば、「科学がある段階で行き詰まった時、過去を振り返って、打開のための着想を求め

ること」(水田 1972, 42) は、よくあることであり、ポールディングの考え方に新しいものは含まれていないからである。さらに、ポールディングの論文では、一切、「過去の思想を無媒介に現在に持ち込むことができるか、できたとしても十分な効果があるか、そこでこそ改めて歴史の媒介が必要なのではないか、いわば歴史的距離の算定によって過去の思想を現在に換算しなければならないのではないか、そして、その場合の媒介とはどうすることなのか」(水田 1972, 42) が問われていないからである。

- (15) cf. Blaug (1978), p. xii/x.
- (16) 「他殺説」という呼び名は、『誰がケインズを殺したか』(Biven 1989) に着想をえた。
- (17) cf. Samuelson (1997), pp. 157-158.
- (18) cf. Samuelson (1958), p. 38.
- (19) cf. Arrow and Hahn (1971), p. 1/1 ページ, 参照.
- (20) 1950年代は一般均衡論の数理的証明が一挙に展開する時代であるが、これは政治介入を嫌った経済学者たちが、政治に介入されずに研究にまい進できる理論研究に逃避した結果とも解釈できる。このような解釈については、池尾 (1995) を参照.
- (21) もし、新古典派のミクロ経済学を学んだ人間にとってのスミスを殺した犯人を捜すのならば、容疑者はケインズでもマルクスでもない。犯人は、新古典派自身だ。スミスは新古典派自身の数理化の過程で新古典派自身によって、スミスの意図を問うことなく、始祖神へと祭り上げられた。スミスの死は、自然死に見せかけられた偽装殺人と言えよう。
- (22) cf. Samuelson (1958), pp. 470-472.
- (23) cf. Stigler (1988), pp. 98-99/115-116 ページ.
- (24) cf. Robinson (1971), pp. 97-100/166-170 ページ, 参照.

参考文献一覧

- Arrow, K. J./Hahn, F. H. 1971. *General Competitive Analysis*, HoldenDay, Inc. and Oliver & Boyd. 『一般均衡分析』福島正夫・川又邦雄訳, 岩波書店, 1976年.
- Biven, W. C. 1989. *Who Killed Jhon Maynard Keynes*, McGraw-Hill Companies, Inc. 『誰がケインズを殺したか: 物語で読む現代経済学』齊藤精一郎訳, 日本経済新聞社, 2002年.
- Black, R. D. C. 1976. Smith's Contribution in Historical Perspective, in Willson, T./Skinner, A. S. (ed.), *The Market and The State, Essays in honour of Adan Smith*, Oxford. 『アダム・スミスと現代』所収, 高島善哉・水田洋・和田重治・田中正司・星野彰男・伊坂市助著, 同文館, 1997年, 付録, 271-300.
- Blaug, M. 1978. *Economic Theory in Retrospect*, 3rd Edition, Cambridge University Press/『経済理論の歴史』久保芳和・真実一男訳, 4分冊, 東洋経済新報社, 1982年.

- . 2001. No History of Ideas, Please, We're Economists, *Journal of Economic Perspective*, Vol. 15(1), 145-164.
- Boulding, K. E. 1971. After Samuelson, Who Needs Adam Smith?, *History of Political Economy*, Vol. 3(2), 225-37. in Wood(ed.), 1983-4, Vol. 3, No. 96.
- Cannan, E. 1926, Adam Smith as an Economist, *Economica*, Vol. 6, 123-34, in Wood(ed.), 1983-4, Vol. 2, No. 55.
- Dow, S. C. 1985, *Macroeconomic Thought:—A Methodological Approach—*, Basil Blackwell Publisher Ltd., London. 『マクロ経済学の構図：方法論的アプローチ』鴻池俊憲・矢根真二訳，日本経済評論社，1991年。
- Famer, R. E. A. 2010. *How The Economy Works: Confidence, Crashes and Self-Fulfilling Prophecies*, Oxford University Press.
- Haakonssen, K. 1981. *The Science of A Legislator: The Natural Jurisprudence of David Hume & Adam Smith*, Cambridge University Press. 『立法者の科学：デイヴィド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学』永井義雄・市岡 義章・鈴木信雄訳，未来社，2001年。
- Harcourt, G. C. 1972. *Some Cambridge Controversies in the Theory of Capital*, Cambridge, Cambridge University Press. 『ケンブリッジ資本論争』神谷傳造訳，日本経済評論社，1980年。
- Henderson, J. P. 1954, The Macro and Micro Aspects of the Wealth of Nations, *Southern Economic Journal*, Vol. 21(1), 25-35, in Wood(ed.), 1983-4, Vol. 1, No. 58.
- Hollander, J. H. 1927. Adam Smith 1776-1926, *Journal of Political Economy*, Vol. 35(2), 153-97.
- Hollander, S. 1973. *The Economics of Adam Smith*, University of Tronto Press, Tront and Buffalo. 『アダム・スミスの経済学』小林昇監訳，東洋経済新報社，1976年。
- Hont, I./Ignatieff, M.(eds.). 1983. *Walth & Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge. 『富と徳：——スコットランド啓蒙における経済学の形成——』水田洋・杉山忠平監訳，未来社，1990年。
- Howard, M. C./King, J. E. 1989, *A History of Marxian Economics, Volume I, 1883-1929*, Macmillan Education Ltd. 振野純雄訳，『マルクス経済学の歴史(上)：1883-1929』，ナカニシヤ出版，1997年。
- . 1992, *A History of Marxian Economics, Volume II, 1929-1990*, Macmillan Education Ltd. 振野純雄訳，『マルクス経済学の歴史(下)：1929-1990』，ナカニシヤ出版，1998年。
- Hutchison, T. W. 1978, *On Revolutions and Progress in Economic Knowledge*, Cambridge University Press. 『経済学の革命と進歩』早坂忠他訳，春秋社，1987年。
- Keynes, J. M. 1926, *The End of Laissez-Faire*, London, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. 9, The Royal Economic Society, Macmillan Press Ltd., 1973. 「自由放任の終焉」『ケインズ：ハロッド』宮崎義一，伊藤光晴責任編集，世界の

- 名著シリーズ, 第69巻所収, 中央公論社, 1980年.
- . 1936, *The General Theory of Employment, Interest, Money*, London, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. 8, The Royal Economic Society, Macmillan Press Ltd., 1973. 『雇用, 利子および貨幣の一般理論』関宮陽介訳, 上下巻, 岩波文庫, 2008年.
- Kregel, J. A. 1975. *The Reconstruction of Political Economy: An Introduction to Post-Keynesian Economics*, 2nd ed., Macmillan. 『政治経済学の再構築』川口弘監訳, 日本経済評論社, 1978年.
- Sylos-Labini, P. 1976. Competition: The Product Market, in Skinner/Willson (ed.), 1976.
- Leslie, L. T. E. 1870. The Political Economy of Adam Smith, *Fortnightly Review*, N. S., Vol. 8, pp. 549-63. in Wood (ed.), 1994.
- Mankiw, N. G. 2006. The Macroeconomist and Engineer, *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 20(4), 29-46.
- Marchall, A. 1920. *Principles of Economics*, 8th edition, Macmilan and Co., Limited, London/『経済学原理』永沢越朗訳, 全4分冊, 岩波ブックセンター信山社, 1985年.
- Mas-Colell, A./ Whinston, M. D./ Green, J. R. 1995. *MicroEconomic Theory*, Oxford University
- Myers, M. L. 1976. Adam Smith's Concept of Equilibrium, *Journal of Economic Issues*, Vol. 10(3), 560-75, in Wood (ed.), 1983-4, Vol. 3, No. 108.
- Negishi, T. 2004. Adam Smith and disequilibrium economic theory, *The Adam Smith Review*, Vol. 1, pp. 30-39. 根岸隆, 「アダム・スミスと不均衡経済理論」『経済学の理論と発展』所収, 第2章, 2008年.
- Recktenwald, H. C. 1978. An Adam Smith Renaissance anno 1976? The Bicentenary Output- A Reappraisal of His Scholarship, *Journal of Economic Literature*, Vol. 16(1), 1978, pp. 56-83. in Wood (ed.), 1983-4, Vol. 4, No. 146.
- Papola, T. S. 1967. A 'Primitive' Equilibrium System: A Neglected Aspect of Smith's Economics, *Indian Economic Journal*, Vol. 17(1), 93-100, in Wood (ed.), 1983-4, Vol. 3, No. 91.
- Patinkin, D. 1965. *Money, Interest, And Price: An Integration of Monetary and Value Theory*, Second Edition, A Happer International Edition, Harper & Row, New York, Evanston & London and Jhon Wheatherhill, Inc., Tokyo.
- Pokorny, D. 1978. Smith and Warlas: Two Theories of Science, *Canadian Journal of Economics*, Vol. 11(3), 387-403, in ASCA, Vol. 1, No. 50.
- Richardson, G. B. 1975. Adam Smith on Competition and Increasing Returns, in *Essays on Adam Smith*, Skinner, A. S/Wilson, T. (Ed.), Oxford University Press, Part II, Chap. IV, 350-360.
- Robinson, J. 1971. *Economic Heresies: Some Old-Fashioned Questions in Economic Theory*,

- Basic Books, Inc., New York, 『異端の経済学』宇沢弘文訳, 日本経済新聞社, 1973.
- . 1973. *An Introduction to Modern Economics*, McGRAW-HILL Book Company: U. K. 『ロビンソン：現代経済学』宇沢弘文訳, 岩波書店, 1976年.
- . 1974. What Has Become of the Keynesian Revolution, in *Selected Economic Writings*, No. 4, Oxford University Press, Ely House: London, 「ケインズ革命はどうなったか」『資本理論とケインズ経済学』山田克巳訳, 第5論文, 日本経済評論社, 1988年.
- Samuelson, P. A. 1958 *Economics*, 4th Edition, International Student Edition, McGraw-Hill Kogakusha, LTD.
- . 1970. *Economics*, 8th Edition, International Student Edition, McGraw-Hill Kogakusha, LTD.
- . 1976. *Economics*, 10th Edition, International Student Edition, McGraw-Hill Kogakusha, LTD., 『P. A. サミュエルソン：経済学』都留重人訳, 上下巻, 岩波書店, 1977年.
- . 1977. A Modern Theorist's Vindication of Adam Smith, *American Economic Review*, Vol. 67(1), 42-49. in Wood(ed.), 1983-4, Vol. 3, No. 116.
- . 1997a. Credo of a Lucky Textbook Author, *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 11(2), 153-160.
- . 1997b. Foreword: Notes on My Methodology. 「序文：私の方法論についてのノート」『社会科学としての経済学』篠原三代平・佐藤隆三編, サミュエルソン経済学大系, 第10巻, 1997年.
- Sobel, I. 1987. Adam Smith: What Kind of an Institutionalists Was He? Old Wine in New Bottles, *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Cnnerciali*, Vol. 34(1-2), 88-87. in Wood(ed.), 1994, Vol. 6, No. 35.
- Skousen, M. 1997. The Perseverance of Paul Samuelson's Economics, *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 11(2), 137-152.
- Stigler, G. J. 1951. The Division of Labor is Limited by The Extent of The Market, *Journal of Political Economy*, Vol. 59(3), in *The Organization of Industry*, Homewood, Illinois: Richard D. Irwin, Inc., 1968. 『産業組織論』神谷傳造・余語将尊訳, 東洋経済新報社, 1975年.
- . 1968. *The Organization of Industry*, Homewood, Richard D. Irwin, Inc., Illinois. 『産業組織論』神谷傳造・余語将尊訳, 東洋経済新報社, 1975年.
- . 1976. The Successes and Failures of Professor Smith, *Journal of Political Economy*, Vol. 84(6), 1199-213, in Wood(ed.), 1983-4, Vol. 3, No. 112.
- . 1988. *Memoirs of An Unregurated Economist*, Basic Books., New York. 『現代経済学の回想』上原一男訳, 日本経済評論社, 1990年.
- Skinner, A. S./Willson, T. (ed.). 1975. *Essays on Adam Smith*, Oxford University Press.
- . 1976. *The Market and The State, Essays in honour of Adan Smith*, Oxford

University Press.

Wight, J. B. 2002. The rise of Adam Smith: Articles and Citations, 1970-1997, *History of Political Economy*, 55-82.

Winch, D. 1978, *Adam Smith's politics: an essay in historiographic revision*, Cambridge University Press. 『アダム・スミスの政治学：歴史方法論的改訂の試み』永井義雄・近藤加代子訳，ミネルヴァ書房，1989年。

Wood, J. C.(ed.) 1983-4. *Adam Smith Critical Assessments*, Vol. 1~4, Croom Helm Ltd, London & Canberra.

———(ed.). 1994. *Adam Smith Critical Assessments*, Second Series, Vol. 5~7, Croom Helm Ltd, London & Canberra.

池尾愛子，1995. 「経済学の数学化と理論経済学の展開」『経済学における正統と異端：——クラシックからモダンへ——』所収，第8章，平井俊顕・野口旭編，昭和堂。

井手秀樹，1994. 「ハーバード学派」，小西編著（1994）所収，第1章，晃洋書房。

宇沢弘文，1994. 「経済学の考え方」『経済学の系譜』所収，宇沢弘文著作集，第9巻，岩波書店，第1部。

内田義彦，1962. 『経済学の生誕：増補版』未来社。

岡田純一，1976. 「近代経済学とスミス：——最近の理論史的研究——」『『国富論』の成立』所収，経済学史学会編，岩波書店。

奥山利幸，2006a. 「分業と規模の経済」『経済志林』法政大学，73(3)。

———，2006b. 「アダム・スミスの命題群」『経済志林』法政大学，74(1-2)。

小西唯雄編著，1994. 『産業組織論の新潮流と競争政策』晃洋書房。

新庄浩二編著，2003. 『産業組織論：新版』有斐閣。

野方宏，2003. 「参入と戦略的行動」，新庄編著（2003）所収，第5章，有斐閣。

田中正司，1997. 『アダム・スミスの倫理学：——『道徳感情論』と『国富論』』，上巻，御茶の水書房。

———，2000. 『アダム・スミスと現代』御茶の水書房。

田中敏弘，2002. 『アメリカの経済思想：建国期から現代まで』名古屋大学出版会。

中谷巖，2008. 『資本主義はなぜ自壊したのか：日本再生への提言』集英社。

新村聡，1993. 「アダム・スミスにおける自由と統治：功利主義と関連して」『市場社会の検証：スミスからケインズまで』所収，第1章，平井俊顕・深貝保則編著。

———，1994. 『経済学の成立：アダム・スミスと近代自然法学』御茶の水書房。

根井雅弘，1992. 『現代アメリカ経済学：その苦悩と栄光』岩波書店。

———編著，2011. 『現代経済思想：サミュエルソンからクルーグマンまで』ミネルヴァ書房。

廣瀬弘樹，2011. 「ミルトン・フリードマン：ケインジアンとの戦いの末に得たもの」，根井編著（2011）所収，第2章。

藤塚知義，1973. 『経済学クラブ』ミネルヴァ書房

水田洋，1972. 「復活への序曲」『アダム・スミスと現代』所収，高島善哉・水田洋・

- 和田重治・田中正司・星野彰男・伊坂市助著，1977，同文館：第2章，33-44.
- ，1976.『『国富論』が問いかけるもの』『アダム・スミスと現代』所収，高島善哉・水田洋・和田重治・田中正司・星野彰男・伊坂市助著，1977，同文館：第3章，45-70.
- 水田洋・杉山忠平編，1993.『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房.
- 三宅忠和，2009.『産業組織論の形成』桜井書店.
- 横田宏治，2011.「ロバート・E・ルーカス・Jr：厳密性の回復に努めた理論家」根井編著（2011）所収，第8章.
- マルク・ラヴォア，2008.『ポストケインズ派経済学入門』宇仁弘幸・大野隆訳，ナカニシヤ出版.
- ジョン・ロビンソン，1976.「日本語版に寄せて」『ロビンソン：現代経済学』所収，宇沢弘文訳，岩波書店.
- 若田部昌澄，2009.『危機の経済政策：なぜ起きたのか，何を学ぶのか』日本評論社.